

瀬戸内圏の特異性と島の魅力

長嶋 俊介（鹿児島大学 国際島嶼教育研究センター）

[本城先生]

瀬戸内圏の特異性と島の魅力ということで、鹿児島大学 国際島嶼教育研究センターの長嶋先生にご講演をお願いしたいと思います。長嶋先生は京都大学を卒業され、奈良女子大学を経て、現在、鹿児島大学に在職されておられます。どうぞよろしくお願いいたします。

[長嶋先生]



鹿児島大学の長嶋です。どうぞよろしくお願いいたします。私は新潟県佐渡島生まれです。日本海という内海で生まれ育って、島の研究をしようという志を持ち、大学に入った時から島のことを意識してきた者です。このような人間が佐渡以外の島に初めて行ったのが、実はこの香川県の島々です。先ほど、ある人と話をしていたら、「私はまだ生まれていない」と言われましたが、1971年の10月から

行った瀬戸内の島々、まさに香川の島々がスタート地点でした。

既に宮本常一先生の「日本の離島」という本の上下巻を読んでおり、その中で「瀬戸内海の島々は隣の島でも違っており、実に島とはいろいろ違うのだ」ということを、かなり強調されていました。そこで、どう違うのかを見たくてずいぶん歩きました。結局、瀬戸内海の有人島を全部歩いて、日本中の島も全部歩いて、世界も150カ国のうち4,000の島を歩いています。それほど島に思いを抱いており、違いを見たくて、ずっと歩き続けてきました。そうしているうちに環境とか、歴史とか、生活とか、暮らし方、それから産業などいろいろなものが見えてくるようになりました。

だから島は学びの場として非常に面白いし、島は孤立しているのでとらえ易い。比較することによっていろいろなものが見えてくる。そういった意味で島研究 island study は、

とても面白いと感じています。特に皆様方は実際に瀬戸内に住んでおられるので、むしろ私のような「外から見た瀬戸内論」をたまに聞くのもよろしいのではないかと、今

瀬戸内圏の特異性と島の魅力

- 1)インランドシーの形成と特質
- 2)庭・畑・道の多島海
- 3)島の歴史からみた瀬戸内島嶼
- 4)瀬戸内島嶼の多様性と魅力
架橋島群と個性的離島群
- 5)豊島から環境教育発信の意義

日は少し大胆な話をしようと思います。私は歩きながら瀬戸内海をそのように見ていたのですが、例の豊島問題が出てから豊島に集中しており、他の島を歩かなくなっています。今日はそういったことを含めて皆様に雑ばくな話をしてみたいと思います。

瀬戸内海は inland sea ですが、地中海的 inland sea とは全く違います。また日本海の inland sea とも違います。特に日本海の場合だと、冬の景色と夏の景色が極端に違います。瀬戸内海にいる人から見れば当たり前なのですが、瀬戸内海は冬でも空が青い。一方、日本海は山陰や裏日本といわれるように冬景色が全然違います。このように徹底的に違うのです。

それから歴史的に見ると、瀬戸内海は江戸時代の主要な交通ルートでした。日本海と瀬戸内を結んで上方に行くということが最も主要な交通ルートで、今でいう新幹線がそこに走っていたようなものです。そういう意味で瀬戸内海は非常に中心性のある地域でした。

基本的な定義である隔絶環海狭小として離島を一つ一つ見るわけですが、瀬戸内海の島は同じ隔絶といっても少し違います。環海といっても基本的には閉鎖性水域です。霧などが発生すると行けない時があるのですが、交通の途絶もありません。狭小といっても瀬戸内海の中で他地域と繋がる暮らしができ、狭小性も改善できます。そういう意味で瀬戸内海はかなり違う海なのです。内から見ると気付かないと思いますが、外から見ると非常に違います。このようなことを島嶼学という視点から見ると、瀬戸内島嶼学というものがあるのだろーと思います。ですから瀬戸内海の島は研究の対象として非常に興味深い所だと思っています。

今日は時間もあまりないので、思い付くことを簡単にまとめて来ました。基本的に瀬戸内海は他と違った inland sea です。しかも多島海です。韓国では多島海をタトウヘといいますが、瀬戸内海と全然違います。遠浅の海でヘドロ状のところはずうとあって、非常に潮流が激しく干満の差が大きいのです。同じ潮流が激しいと言っても、瀬戸内海の場合は海面が下がっても上がっても海の景色はそれほど違いませんが、韓国の多島海の方は極端に変わります。船も行けないくらい浅瀬がずうと広がるので、島と島を結ぶために橋をかけて不便さを改善しようとしています。本土と結ぶより島どうしを結びつけるという展開をしており、そういうところが基本的に違います。外を歩いていると、このようなことがいろいろと見えてきますので、その話を少し続けてみたいと思います。

世界の島々を歩いてみたら、PHP から「子供向けの本を書きなさい」という話があり、「世界の島大研究」という本を監修しました。この本はあちこちから需要があり、出版社に「図書館に本を贈りたいので、何十冊か下さい」と注文したところ、「もう在庫がありません」という



世界の海と比較

- ・インランドシー
- ・準閉鎖性水域
- ・名勝の地
- ・移動手段が結ぶ景観の海
- ・世界の島嶼研究のメッカとしての地位
- ・生産と環境両立のモデルケースと失敗学の場

返事でした。仕方がないので、最近は古本をコレクションして希望のあるところに贈っています。

世界の島々の中で見ますと、アドリア海は非常に透明度が高いのです。石灰岩層によって透明度が高いということだそうです。そして、非常に平穏でもあります。ただ、「水清ければ魚棲まず」と言って、同じ内海でも瀬戸内の方がはるかに多くの魚が生息しています。そういったことを見ても瀬戸内は非常に興味深い場所です。

それから、閉鎖性水域とはいいますが、実は相当水の出入りがあります。それこそ、先ほどの講演のイカナゴですが、外からのミジンコなどを食べてお腹が黒いイカナゴと、瀬戸内海の中の方のお腹が白いイカナゴとに極端に分かれます。これは瀬戸内海の海水が外の海と出入りしているということです。このようなことから他の閉鎖性水域とも違います。やはり、ここは準閉鎖性水域と言わざるを得ないと思います。

それから、先ほど少し言いかけたのですが、瀬戸内海は中世も含めて、歴史の場所として非常に面白いし大事な場所です。そういう意味でも歴史的に名高い名勝の地域があちこちに存在します。当初、名勝という定義に従って屋島が日本で最初の国立公園に指定されようとしたのですが、移動交通手段から見えてくる瀬戸内という広がりが増えらるることによって、瀬戸内海の広い範囲が瀬戸内海国立公園として日本初の国立公園になりました。

大学時代の同期の西田正憲が「瀬戸内海の発見」という本を書きましたが、彼が指摘しているように、瀬戸内海は箱庭的で、100m か 200m あるいは 300m ぐらいの高台から見た景色が非常に優れています。なぜかというとな人の動きなどが見える景色なのです。瀬戸内海は里海、里地、里山の連続空間を一望できる場所です。最近、愛媛では里島と書いて「りとう」という言葉を使い始めていますが、そのように連続空間をとらえることができる場所です。すなわち瀬戸内海は人と自然の相互作用が調和的に美しく見えているわけです。

瀬戸内海には単なる景勝地以上のものもあります。宮本常一先生などが「人の手の加わった自然」というものが本当は一番美しいのだ」とよく言いますが、そういう意味での典型的な美しさがあります。日本を代表する景観です。そこには文化があって、人の営みの歴史が景観に現れていて美しい。これは我々が誇って良いものだと思います。ここにも瀬戸内のすごさというのを感じます。

それから、移動交通手段を結ぶ多島海です。かつては島と島が相当結びついていました。線上に結び付いており、それが面状に広がってきました。ところが今では特定の都市と結び付き、島どうしが繋がらない海になってしまっています。ところが、新しい展開として、最近、瀬戸内海国際芸術祭が開催されるようになり、例えば犬島（いぬじま）と豊島（てしま）を結ぶ航路ができ、豊島と直島（なおしま）も定期的な航路ができるようになりました。このようにして繋がってくると展開が変わってくるということです。そういう意味で、これから、いわゆるクルージングというものが新しいビジネスになろうとしています。それは必ずしも大型客船で行う必要はありません。このように瀬戸内の持っている多様な島々の面白さを多様な次元で探求していく興味深いルートというものはいくらでも考える

ことができ、ここにビジネスチャンスがあると思います。

次に世界国際島嶼学会や UNESCO（国際連合教育科学文化機関）のインシュラーという組織の発足に瀬戸内海が関連していると言う話をしたいと思います。インシュラーは島に関して行政官と科学者が一緒になって研究し発表して、お互いが地域振興や科学振興をさせようという組織で、UNESCO 中のヒューマン バイオ スフィアに関わるところのセクションが音頭を取ってやってきたものです。実は、それが瀬戸内海と関連して始まったという話を少ししたいと思います。

右図に島嶼学創設聖地と書いていますが、私は島嶼学発祥の地はあちらこちらにあると思います。広島で 1989 年、すなわち平成元年に「海と島の博覧会」が開催されました。この時、世界の島の研究者を集めて、かなり大規模なフォーラムが行われました。大来佐武郎など日本からも大物が参加しました。世界からはヨーロッパ、アメリカ、それからオーストラリアなどから来ました。特にヨーロッパからはたくさんの方が来ました。そして、大変熱心な議論が行われました。

瀬戸内と地中海/島嶼学創設聖地

- **海と島の博覧会** 1989年(平成元年)、広島県内で地方博ブームに乗って開催された
⇒竹内寅雄知事=離島振興法産親の一人
⇒世界の島専門家集合⇒1992年5月UNESCO,INSULA シチリア
- 国際島嶼学会 1992年5月設立決定(カリブ・バハマ), 1994年6月第1回大会沖縄
- 日本島嶼学会 1998年7月設立[モーリシャスで紹介]
- **家島**地方大会 1999年4月
竹内啓一 2代目会長
国際の海と大河・景観の海

先ほど言った UNESCO のヒューマン バイオ スフィアをやっているセクション、これは世界自然遺産などに絡んでいるセクションですが、そこの人がダイアラさんという人です。その後、彼はインシュラーという組織を立ち上げました。その時、彼が口癖のように「あの広島が良かった」と言っています。「広島に世界の島の学者を集めて、いろいろな議論をした。それがきっかけになって、インシュラーを世界に展開できたのだ」という話をしていました。

このようなきっかけを作ったことは、瀬戸内海が世界に向けて果たした役割の一つになります。ではなぜ「海と島の博覧会・ひろしま」を開催したかと言うと、広島県知事が島根県の行政官だった時に、離島振興法の起草にかかわったメンバーの一人だったからです。ですから、彼の強い思いもあって、「海と島の博覧会」を契機にして、このような集まりに発展させようと行政主導で提案し、さらに世界に呼びかけて開催したのです。その意味からも「瀬戸内海は島嶼学創設の聖地である」と思って良いと思います。

そのインシュラーの集まりが 1992 年 5 月にシチリアでありました。しかし、全く同じ日、同じ時間にバハマで「世界の島々Ⅲ」という大会が開催され、我々、日本のチームは 2 手に分かれて行かざるを得なかったのです。私はインシュラーの方に行きました。バハマの大会の方は、沖縄県が次の大会を誘致しようと県費でたくさんの学者を派遣しました。私も呼ばれたのですが、先にシチリアの方を予約してしまったものですから行けません。そのバハマの大会で国際島嶼学会の設立について話が出て、国際島嶼学会の第 1 回

の大会が 1994 年に沖縄で開催されました。そこに集まった日本人達に向けて「日本島嶼学会を立ち上げよう」と発案し、日本島嶼学会の設立に繋がって行きました。10 年前 2003 年にも豊島で日本島嶼学会を開催していただきました。このように瀬戸内が果たした役割は非常に大きいと言うことを述べておきたいと思います。

日本島嶼学会の設立直後に第 1 回の地方大会を家島 (いえしま) で行いました。その時、私は地理学の権威である竹内啓一先生にかなり強引なテーマをお願いしました。inland sea というテーマで「地中海と瀬戸内海を比較しろ」というものです。竹内先生は「同じ inland sea と言っても、地中海はいろいろな国と民族・人種に囲まれた内海なのだ。瀬戸内海は県レベルの内海だ。地中海と瀬戸内海は基本的に違うのだ」とおっしゃいました。言ってみれば瀬戸内海は大きな川の中に島々があるといった広がりでのディメンジョンですが、地中海は世界 7 つの海の 1 つとされています。お互いに内海ですが、そこが基本的に違います。

東京都の島々の人達を連れて、地中海にあるシチリアのエオリア諸島に行きました。エオリアとは風の島々ということです。エオリアにはボルカノ島、すなわちボルケーノ (火山) の語源の島とか、ストロンボリ島という間歇噴火を毎日続けている島々があります。ストロンボリ島は夜見ると噴火が見えます。このように面白い島が並んでいます。しかし、そこは瀬戸内海と基本的に違っていています。大きな海は波も高く船も欠航します。ストロンボリに行って夜の噴火を見るつもりが行けなくなり、昼間に行って、その日のうちに帰らなければならなくなったのです。その時、あの伊豆諸島の外海で育った人達ですら、大きな波に耐えられなくて船酔いをしてしまいました。瀬戸内海の人達には想像がつかないと思います。内海で船酔いをするなど信じられないと思います。やはり、内海というよりも地中海は本当の海なのです。

ですから、同じ inland sea といっても、次元が違ということです。逆に言えばそれは瀬戸内の特徴でもあります。私が奈良女子大学にいた時代に、学生と豊島の調査をしました。1972 年 12 月 28 日から 2000 年までの豊島の長い闘争で、豊島の住民が毎日どのような行動をしてきたかを調査したのです。記録を取り直し、原資料も全部集めて計算させました。25 年間ですから大変な作業でした。昨日どうしたかということは記憶にないことも多いと思いますが、結構、皆さん記録を残していて、「いつどういう仕事をして」、「その時何人集まって」というようなメモを取っていたのです。外部資金を得て、そのようなものを集めて作業をさせたのです。それで、学生達は内海を知っていたわけです。今度は学生達を伊勢の神島 (かみしま) の方に連れて行きました。そうするとあのうねりのある波を見てびっくりするのです。逆にそれを見た私もびっくりしました。つまり、内海を知っていても外海を知らないのです。我々、日本海の佐渡島に生まれた人間から見れば当たり前のことです。だから瀬戸内海の景色と瀬戸内海の外の景色はずいぶん違うという当たり前のことが意外に知られていません。このことが外から見ると見えてくるわけです。その意味でも、非常に興味深い場所だと思っています。

それから、inland sea といっても昔の瀬戸内海は違います。先ほどアサリの講演がありました、これはシジミの話です。私の研究仲間で、豊島や犬島の調査研究を行っている遠部さんという人がいます。当初、彼は北海道大学にいましたが、瀬戸内海の調査研究のために徳島に来て、また、北海道に帰っています。その彼が、「縄文時代の瀬戸内海はずいぶん違う」と話しています。「縄文時代の瀬戸内海は海でなかった。中に湖があったけれども陸地が繋がっていた」と言う話です。2000年以上前のことですが、海水の温度が上がり海面が上昇したため、瀬戸内海になりました。遠部さんからいただいた資料を見ると、そこに出てくる貝塚の貝の組成はヤマトシジミなどが多い。ヤマトシジミが多いということは、まさに瀬戸内海が海でなかったということです。このような貝が主に内湾の所に出てきます。ですから豊島にヤマトシジミがいたということは、このあたりが陸で繋がっていて、河口部だったということになります。そういう意味で、瀬戸内海と言っても長い歴史で見ると、ずいぶん映像が違ってきます。面白いので、遠部さんに「ぜひ使わせてくれ」とお願いして、送ってもらった図を今スクリーンに映しています。最近是人骨も出てきて、その貝塚が墓地でもあったということが、彼の研究など最近の研究で明らかになります。貝塚が出てきた時代というのは特定の時期に限られます。西暦 7000 年代前の頃に集中しています。このように瀬戸内海は歴史的に言っても非常に興味深いものです。

古墳時代になると、いわゆる信仰の対象の島々が出てきます。祭祀の島、大三島とかです。あるいは直島のすぐ前にある荒神島（こうじんじま）とかです。このようなところは祈りの場でした。ですから島々には面白い歴史があります。また、鉄に絡んで弥生の文化が展開していく。そういう場所も非常に興味深い。

瀬戸内は古代史を見ることも結構面白い。白村江（はくすきえ）の戦いで大和が新羅に

敗れ、報復を恐れて、その後屋島などあちこちに砦を作りました。愛媛県と広島県の境にある甘崎島（あまさきじま）もそういう所だったということです。私も現地に行って、実際に昔の石壁や石積みなどを見ました。私は瀬戸内を少しは知っていたつもりでしたが、まだまだ知らないことがたくさんあって面白く感じました。そういう意味で興味深い。

また、「海賊の拠点だった所にも非常に面白い歴史があるのだな」と、今、あちこちを歩きながら改めて思ったところです。無人島になった島々もなかなか興味深い。奥深いところがあります。

それから、離島振興法です。最初は外海の離島を対象にできたのですが、その後、拡大されてきました。典型的には魚島（うおしま）のような島です。隔絶していて、環海で、狭小な離島性のある島が瀬戸内海の中にもあるのだと主張して、離島振興法の対象になる

インランドシーの形成と特質 島の歴史からみた瀬戸内島嶼

- 縄文の瀬戸内 この時代瀬戸内の存否
- 弥生の瀬戸内 貝塚が語る「内海前状態」
- 古墳時代の瀬戸内
 - 島の前方後円墳 吉備の地位と製鉄
 - 淡路島の海人・製鉄遺跡
 - 祭祀の島々
 - 国防の砦[屋島/古城島=甘崎島=水軍島]
- 海賊閥所/砦/出撃の島々+ 海国道幹線+ 相場形成の島
- 国立公園指定第一号へ 屋島から全域へ/瀬戸内海の発見
- 離島振興法 外海離島から内海離島組入れ
[意図的除外⇒組み入れ再編]
- 生産の海と公害・廃棄の海と人災
- 現在の瀬戸内 海道・産業・景観・自然
富栄裏から貧栄の海

よう求めてきました。

面白いことに島にはそれぞれプライドがあります。いわゆる海路地帯は生活に便利で観光客も来ます。このように「我々は遅れた所ではないのだ」と主張したいところがあるのです。典型的には小豆島です。国土庁は離島振興法の対象を呼びかけたのですが、小豆島が NO と言って離島振興の対象になりませんでした。観光地だから離島と認められたくない。それで長いこと突っ張ってきたのです。

一方、離島振興法に組み込まれたのが直島です。直島は陸に近く工業の島ですから、もともとは離島振興法の対象でなかったのですが、豊島の廃棄物の処理場を直島に作る事になり、これにより生じる風評被害基金対策もあって離島振興法の対象になりました。

他にもあります。当時、淡路島には本土と橋が架かっていませんでした。淡路島の南、南淡町に沼島があります。沼島と書いて「ぬしま」と読みます。この島が離島振興法の対象になって、その対岸も対象になりました。ですから淡路島の一部が離島振興法の対象になっているのです。

このように瀬戸内海を見ると、プライドのある島々なのです。逆にプライドが邪魔することもあります。塩飽水軍（しわくすいぐん）の塩飽（しあく）の島々には人名（にんみょう）という制度があり、苗字帯刀を許された人達はプライドを持って、株を持っていました。ですから、塩飽諸島の与島に瀬戸大橋を架ける時に、その人名でもっている人達が各地に転在して、土地の所有者などを調べるのが大変な作業であり、中四連絡橋の関係者は大変な思いをしました。

塩飽手島（しあくてしま）。その近くに小手島（おてしま）という属島があります。塩飽の手島には人名がいて、農業という仕事と漁業という仕事の見方が全然違っていました。当時は漁業のような不安定な、はしたないと言いますか、そういう仕事をするのはプライドが許しませんでした。だから手島は農業だけでした。一方、属島の小手島には生活の苦しい人が行きました。困窮島と言いますが、生活の苦しい人が、生活の生産の場を他の島、とりわけ無人島に移るという展開をしたのです。この困窮島という概念は柳田國男や桜田勝徳が出してきたものです。そこには小豆島などいろいろな所から困窮した人が来ました。もう亡くなっていますが、昔、私も初代の人のお子さんにも何人か会ったことがあります。かつてはその本島である手島で合同の学校体育会などが行われ、小手島の人達はぼろ着を着て参加し、とても恥ずかしい思いをしたとの話をしていました。今はその本島の学校がなくなって、困窮島であった小手島に学校があります。漁業を中心として産業が大発展したのです。これはプライドが邪魔をしたケースです。このようなものが瀬戸内海にあります。歴史とかが絡んでいて、いまだにプライドなどが影響しているのです。ちなみに困窮島という制度は生活に困った人に、無人島などで生産の場や生活の場である家屋などを与えて、立ち直るきっかけにしてもらうものです。

小手島はそれでも大きい島ですが、ごく小さな島の場合、例えば、小値賀島（おぢがじま）の大島の属島に宇々島（ううじま）という島があります。そこは 2 家族しか生産でき

ないほど小さな島です。江戸時代に始まった制度ですが、この島では 5 年間、自由に生産をしてよい。魚場でアワビやサザエなどを自由に獲ってよい。海藻の付きも大変良く、それが全て自分の収入になる。麦を作り牛も育てる。さらに道普請や建前など、冠婚葬祭にも全て行かなくて良い。「お前はただ 5 年間生産をしていて良いのだ」と、あらゆる行事や労力を免除してくれます。すると、そのうちに財産ができるわけです。そして、戻ってくると、また皆で協議して推薦された苦しい人から順番に宇々島に送っていきます。ですから、皆が中レベル以上の生活を送ることができ、とても仲の良い島です。このような困窮島は日本から出てきた「自力更生」の島です。「困った人がいたら分け与えれば良い」と言う慈悲の心ではなくて、「困った人がいたら、生活の仕方や魚の釣り方を教えて、そして自立させていく」という考え方です。これは日本型の福祉制度です。

今でもやろうと思えば宇々島に行けばできますが、行く人がいません。1961 年頃に対岸の島に電気がきて、あまりにも格差ができたので行くのを止めたのです。その困窮島は長崎に 1 つと瀬戸内海に 3 つあります。瀬戸内海の困窮島は愛媛県の中島の二神島（ふたかみじま）の属島の由利島（ゆりじま）。そのすぐ対岸に見える大水瀬島（おおみなせじま）。この島は周防大島の沖家室島（おきかむろじま）の属島です。それと先ほどの塩飽の小手島です。瀬戸内に 3 つもあるわけです。

これは島だけの現象なのかと言うと、実は岡山にも困窮した人を助ける貧者救済の山というものがあります。それから、老けて困ったら世話してあげるというしくみがあったりもします。典型的な日本的文化の形が島の場合には見え易いというだけの話であり、このようなものがもともとあるのだという意味で、非常に興味深い所だと思います。

それから、現在の瀬戸内は生産の場でもあります。かつての水島コンビナートの原油流出事故のように、いざ事が起こると大変なことになってしまう場所でもあります。先ほどの講演のように透明度などが一気に変わってしまうなど、瀬戸内海は注意深く管理しないとイケない脆弱な海でもあります。このように典型的な場所です。

例えば、山口県の海岸に瀬戸内の大工業地帯があります。瀬戸内は多様で島も面白いが沿岸も面白い。しかも島と沿岸が橋で結び付いていて、車でどんどん回れるようになってきている。かつてはあり得なかったことであり、ダイナミックに変わっている。そういう意味でも非常に興味深い場所です。また、先ほどの講演にあったように貧栄養の海になったということなど、これから大いに勉強しなければならない所です。

瀬戸内は実に多様で面白く、いろいろな意味で日本の象徴でもあります。私は子供のころから瀬戸内は富士山と奈良と並び日本のシンボルであると思い込まされて育った人間の一人です。そして、瀬戸内はいろいろな意味で非常にブランド力がある場所だと思っています。

私は瀬戸内オリーブ基金の初代理事長を
させていただき、今もそれに絡んでいるので
すが、オリーブ基金の中でいう瀬戸内は河川
などの流域も含め、もっと広く見ており、琵琶
湖も瀬戸内に入れて援助の対象にしていま
す。なるべく広く、例えば紀ノ川あたりまで
入れて、南は豊後水道あたりまで入れて瀬戸
内を考えているところです。狭い瀬戸内も含
めて、瀬戸内はそれ自身、高いブランド力が

日本の象徴:瀬戸内[ブランド力]

- 日本三景 ⇒世界文化遺産
- 純日本シンボル 富士・奈良・瀬戸内⇔多様性
- 日本最初の国立公園 瀬戸内海国立公園
- 平清盛 瀬戸内を公の幹線道へ
- 歴史・信仰・産業の街道
- 山紫水明のお盆型景観美
- 内海水産生産の拠点と管理
- 沿岸型工業立地 重厚長大⇒低環境負荷
- 汚染/赤潮の海 ⇒水質改善保持の海
- 世界屈指の人口稠密の沿岸と多島海

あります。日本三景の一つ宮島が世界文化遺産にいち早くりましたが、宮島の厳島神社
に関わる平清盛が開いた中世の瀬戸内のロマンというのもなかなか興味深い。その頃から、
瀬戸内が海の道、幹線道になっていったということもあって、歴史や信仰や産業の街道と
しても非常に興味深い所です。

四国にお遍路さんがありますが、島四国はあちこちにあり、各島で非常に多様な展開を
しています。一番小さな島四国があるのはたぶん青松園のある大島だと思います。それぞ
れの島に島四国があつたりして興味深い。

それから山紫水明にしてお盆型の景観美というものは、まさに瀬戸内独特のものであり
ます。これももっと大々的に宣伝・アピールしてもよいと思います。また、これだけ人口
超密な地域が成立するのも瀬戸内海があるからだだと思います。そういう意味でもこの瀬戸
内は非常に興味深い。

さらに、我々のように島のことを研究している人間からすると、宮本常一先生が生まれ
た地域であることに大変大きな意味を持っています。この意味でも島嶼学の聖地だと思
います。宮本先生が撮った当時の瀬戸内海の写真。古い昭和の写真です。戦後まもなくの頃
の写真ですが、大変貴重なものです。この前の日曜日に池袋で island のイベントがありま
した。I ターンを呼びかけているもので、毎年 1 回秋に大きいものをやっています。今回、
その会場に宮本先生の写真をずらりと並べており、すごいなと思いました。やはりこのよ
うなものは本当に貴重です。

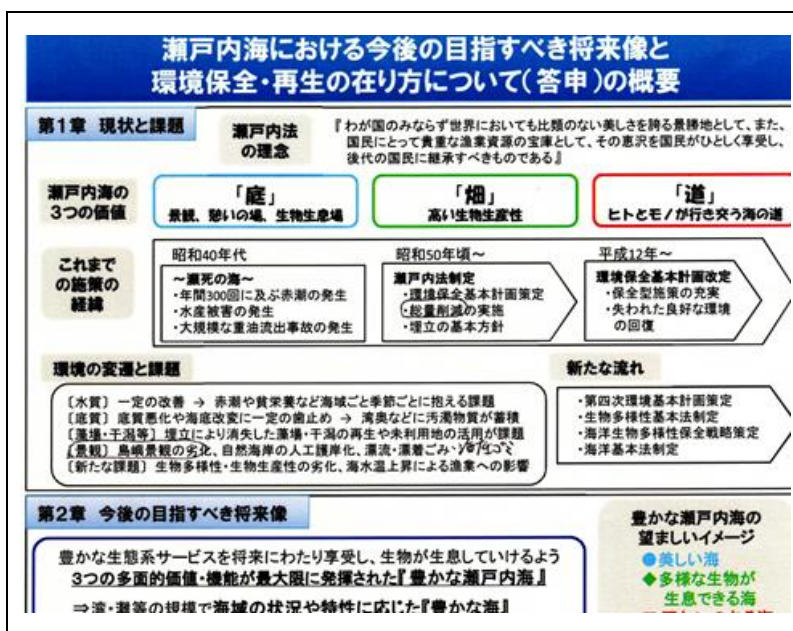
宮本先生が写真に撮った頃の島々は耕して天に至っていました。本当に無駄なく耕して
おり、それがまた非常に美しい。管理された里島(りとう)、里海の連続空間がまさに一つ
の画面の中で一望できるすごさです。そのような時があったという意味でも、瀬戸内の歴
史をとらえてみる面白さがあります。今と比べてみる面白さ、島々を比べてみる面白さ、
そしてその推移をみる面白さなどを感じます。

最近、この瀬戸内海の広域の県が一緒になって瀬戸内を見直し、「豊かな瀬戸内海」を作ろうと言うことで、いろいろな運動をしています。その時の知事会に出た資料のコピーをもらって、今、皆様に見ただけいていますが、この「庭」と「畑」の海というのは、まさに生産生活の場としての瀬戸内ということですね。

それから、「道」としての瀬戸内というのはまさに流通や観光の歴史の道です。これらをうまく重ねながら展開していくことが必要だろうと思うし、この道としての島々をもっと意識して良いのではないかと思います。特に瀬戸内海という、中における多様性と相互の関わり合いです。そのようなものが、もともと道として瀬戸内海に存在していたということのすごさです。そういったところが古代から始まり現代に至る面白さです。また、その重要さをとらえていくことが必要だと思います。

特に、瀬戸内海の生活圏や生産圏ですが、人が関わった自然との相互作用であるところを海だけでなく島を含めて、さらにその流域の川上も含め、一体となった繋がりとして、もう一度見直していく。そのようなことが新しい瀬戸内学をさらに豊かなものにしていくのだろうと思います。また、それが本来の視点だろうという気がします。

このようなことから、私は瀬戸内の県知事達の



庭・畑・道の 多島海

- 環瀬戸内
- 瀬戸内水系
- 瀬戸内流域
- 瀬戸内生活圏・生産圏[人為/人間圏=地球/水球/人間圏の衛星]
- 近未来と過去の接合

話の中に、「なぜ、島というものをもっと出してくれないのか」と少し歯痒い思いがします。瀬戸内の島は可能性や素晴らしさを持っています。しかし、瀬戸内のどの島々も他の地域に先だって、人口過疎と高齢化を経験しています。瀬戸内圏研究センターが取り組んでいるように、多様な課題を抱えて存在している島々を十分にケアしなければ、人が住まない島になってしまいます。これによる社会的損失は非常に大きいものです。島々に人が住めるように、いろいろな形でバックアップやサポートをしっかりと行っていくことが大切だと思います。

瀬戸内国際芸術祭のように、短期間に大量の人がぱっと行ってぱっと帰って混乱するという状況はいけない。もっと静かにしっかりと受け止めて、それを繰り返していくというようにしくみ作りやケアを基本的な理念として持ち合わせてほしい気がします。やはり、もっと島を知ってほしい。「瀬戸内海は内海だけでも多島海なのだ」、「多くの島が多様に存在して成り立っている素晴らしい空間で海域なのだ」、「そこにはもう一つの主人公がいるのだ」ということをしっかりと意識してほしい。その島にいるアクターに良い形でその地域を管理していけるようなしくみ作りをもっと考えてほしい。

デンマークの島々のことですが、「人が島に住むことによって、むしろ自然を守れるのだ。自然の小さな変化はそこに住んでいる人が一番よく分かるのだ。だから、無人にしないためにも国はどんなことでもすべきだ」と言うことで、ボーンホルム島に定期航路の寮を設けようとなりました。しかし、かなり強制したこともあってストライキが起こり、結局この寮は設けることができませんでした。一方、サムセイ島の場合は「人が住むことの質が大切で、むしろ人が来過ぎることをコントロールするのが行政の仕事だ」という意識を持って島を経営しています。それから、弱者を作らない。島に高校がなかったら、高校に行くために島と往復するフェリー代を国が年30回出す。生活費の2/3を県が出す。なぜかと言うと、島の住民が悪いのではなくて、行政の都合で島に高校が作れないからということですからデンマークは社会的弱者を作らないという国造りを島に関しても徹底しています。

このような理念が瀬戸内の島々にあれば、ずいぶん変わってきます。病院並みの機能を持つ済生丸のような船が島を巡回して健康や医療をケアするというように、暖かい目線でケアをしながら瀬戸内国際芸術祭などのフォローアップができれば、もっと違う展開になると思います。今、いろいろな産業や企画イベントが島に入って展開したり、島に生まれたりしていますが、これらをサポートできる体制が重要です。

だから、里地、里山、里海、里島です。里島（りとう）が本当に豊かな瀬戸内海というのは、国全体に繋がると思います。このように展開を考えていく必要があると思います。

それから未来の瀬戸内には温暖化の問題が出てくると思います。海の中の 1℃は陸の 5℃ぐらいに相当し、生態系に大きな変化を生むと言われてますから、このことも意識する必要があります。また、これからは高潮、大きな風による高潮が発生して風の力で津波になります。そうするともっと被災地が増えてくると思いますので、そろそろ瀬戸内の安全基準値を見直す必要があります。リスクマネージメントを考えた瀬戸内海です。安全県香川を宣言したようですが、必ずしも安全ではないということをもう少し意識していただきたい。

東日本大震災では火が海を渡り、対岸の気仙沼大島に火事が移ったのです。このようなこともあるので、必ずしも安全神話を信じないで、いろいろなリスクマネージメントを行ってほしいと思います。

まだ、言いたいことがあります、時間が来ましたので、今日はこれで終わりたいと思います。どうもありがとうございました。



未来の瀬戸内と温暖化

- 高潮と巨大台風
- 段波発生⇔津波
- 南海トラフと津波
- 水温上昇と海焼け
- 水温変化と魚類生存・棲息域の変化
- 瀬戸内=安全神話の崩壊[最安全県香川の懐心は危険]
- 火は海を渡る



[本城先生]

長嶋先生、どうもありがとうございました。紹介が遅れましたが、今、長嶋先生は日本島嶼学会の会長をされています。それでは、質問をお受けします。

[稲田先生]

瀬戸内海の島々を見ておりますと、島に人がいなくなるのではないかとというような恐れを抱いてしまいます。長嶋先生にお話いただいたように、いろいろな個性を持ち、いろいろな文化を持ち、歴史を積み上げてきた豊かな島々に人が住まなくなるような状況になりつつあるというのは、山間部の過疎地とも共通して大きな問題だと考えています。一方、沖縄県は非常に元気の良い島々が展開しております。長嶋先生のお立場から、何かこのようなことに対してお考えがあれば、教えていただければありがたいと思います。

[長嶋先生]

先月も無人島になった臥蛇島（がじゃじま）を見てきました。明日、由利島にも行こう

と思っています。そのような無人島になった島々がたくさんあって、それなりの理由があります。生産の場がない、若手がいないなど、島を支える力を失った時に一気に崩れてしまいます。島を支える力には限界値があって、それを超えると無人島になって行くわけです。ただ、私は無人島になっても仕方がないところもあると思います。

本当に大事なものは、Iターン、Uターン、Jターン、Oターンというものがあって、島をもう一回作り直していくという活動をいろいろな人とで展開することだと思います。島の出身者が島に帰ってくるのがUターンで、その近くに帰ってくるのがJターン。島に関係のなかった人が移り住むのがIターンです。基本的にインフラさえあれば大丈夫です。インフラがしっかりしているうちに、とにかくそのような人に帰ってきてもらうことで、いろいろな活動ができ島を作り直すことができると思います。

それからもうひとつ大事なものがOターンです。何度も来る。要するにリピーターです。リピーターで島に関わってくれる人が出てくると、また島が元気になります。ですから瀬戸内国際芸術祭などで来た人達をもっとOターンなどに組み入れて行くようなやり方なども有効な方法だと思います。

[本城先生]

ありがとうございました。